

泌尿器科医のためのクリニカル・パール

いま伝えたい箴言・格言・アフォリズム

〈腫瘍/処置・救急・当直編〉

企画にあたって

新しく泌尿器科の専攻医となった先生に私がお話ししていることは、「医師として成熟するためには、時間が必要。その対価として腕を上げていくのだ」ということです。充実した修業期間がその後の人生を左右します。経験がものを言う世界ではありますが、すべて自分が経験しないとダメなのかというと、そうではありません。「巨人の肩に乗っているから、遠くを見ることができる」(ペルナル・ド・シャルトル)という金言があります。もちろん、専門書から学ぶこともあるでしょう。それとは違った手段、金言から学ぶということ、つまり経験が豊富な先輩医師の肩にひょっこりと乗せてもらうという手があるのではないのでしょうか。これが本特集の狙いです。

今回「泌尿器病理診断」(816頁)を執筆いただいた都築豊徳先生(愛知医科大学)は、「発見の旅とは、新しい景色を探すことではない。新しい目で見ることなのだ」(マルセル・ブルースト)を引用されています。「意識することで見える風景が変わる」ということです。成熟とは、「これまで見ていなかったものが見えるようになる」ことだと思います。同じ風景を見ても、印象は1人ひとりが全く違います。意識しないと見えていないことを、私たちは日常生活でしょっちゅう経験しています。先日、私は奈良のお寺で白く咲き誇った萩の花を見ました。リフレッシュして東京に戻ると、何気なく通り過ぎていた道に萩の花が咲いていたのに気づくようになりました。

もっと深い成熟とは、「見えないものまで見える(意識する)」ことだと思います。「ロボット支援手術」(854頁)を執筆いただいた白木良一先生(藤田医科大学)には、「視野外の状況への想像力を磨く!」というクリニカル・パールを残していただきました。

クリニカル・パールを記述することに重点を置いた本企画は、「新しい景色」への誘いです。本特集を読んでいただいた後に見る泌尿器科学の世界が、皆様の「新しい目」で見る世界へと変貌していることを期待しております。

慶應義塾大学医学部
泌尿器科学教室

大家 基嗣